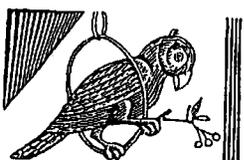


# 特集◆楽しいオノマトペの世界

## オノマトペと音象徴

野間秀樹 (のま ひでき)

「音と意味の結びつきは恣意的である」という言語学の教科書の最初歩の定理にさえ、堂々と疑義を差しはさむキラキラのアウトロー、それがオノマトペだ。



■オノマトペとはどんな単語か？

オノマトペと音象徴について、たつぷり、わんさか、うんとと例を収集し、じっくり、みっちり、がっちり考察し、どんどん、てきばき、さっさと、きっちり整理したい——などと書いたら、読者諸兄から不謹慎だとお叱りを頂戴するだろう。このことだけ見ても、オノマトペと言われる単語群は日本語の語彙の中で、ある特別な「感じ」をもたらす一群なのだということがわかる。

■どこまでがオノマトペか？

ある単語がオノマトペかどうか、母語話者たちは概ね一致した見解を持つ。しかしながら、どこからどこまでがオノマトペかという問題は、意外に簡単ではない。「カッコー」という鳥の鳴き声がオノマトペだということに異論をはさむ者はないだろうが、漢字で書かれた「郭公」という鳥の名はどうかと聞かれたら、ケッコー難しい。「キリギリス」くらいになるとギリギリのところかもしれない。「はたはた」と翻るからといって、「旗」は擬態語か？ そもそもオノマトペには要素を繰り返す疊語という形式が多用される。「はたはた」だって「はたはた」だってそうだ。それに、「きらめく」とか、「ざわめく」、「さんざめく」に見える「〇〇めく」。この形をオノマトペにつけて動詞を作るのに多用されることから考えると、「はたためく」もあるからやはり「旗」は擬態語か？ というような具合で益々（ますます）「謎めく」——愈々（いよいよ）チョーチョー難しい深みにはまってしまった。

外界の音や動物の鳴き声などを言語音によって写した単語を擬声語もしくは擬音語という。「ピンポーン」（正解）。

音のしないものごとのようすを、あたかも音のすることくに、言語音によって描き出す単語を、擬態語とする。「しんと雪降る空に鶯の声」（川端茅舎）。「春の海ひねもすのたりのたり哉」（与謝蕪村）。「水枕ガバリと寒い海がある」（西東三鬼）。フランス語から来たオノマトペという外来語は、普通、擬声語と擬態語を総称するのに用いている。

■オノマトペの語種論と語源論

ここにはいくつかの問題がある。問題の一つは、オノマトペかどうかの境界画定は、ことばを共時的な平面の中で考えるのか、それとも通時的な時間の流れの中で考えるのかによって異なってくるということにある。前者は共時的な語種論、後者は通時的な語源論と言ってよい。前者によれば、私達が、そして皆がオノマトペと感じればそれはオノマトペなのだ、という理屈になる。後者ではひたすら文献学的な証明の範囲でのみオノマトペだと画定できるわけである。チョーチョーなどという単語も、そのうちオノマトペだと皆から言われる日が来るかもしれない。

■語構成とおノマトペの境界画定

いま一つの問題は、「〇〇めく」というような造語成分や、「はたはた」「どんどん」「からから」に見られる疊語構造といった語構成を手がかりに探ってゆこうとしても、絶対的な画定条件を定めにくい点にある。「我々」「山々」「木々」などという例もたくさんあるくらいだから、疊語構造になって

いるからといってオノマトペであるわけではない。そんなことは、「常々」「重々」承知のはずでも、「黒々」とか「寒々」「楽々」といった例を見てゆくと、なんとなく「徐々に」「段々」「どんどん」「ずんずん」オノマトペに見えてくる。語構成も「努々(ゆめゆめ)」「軽んじてはならないのである。

#### ■オノマトペ起源の漢語

いま一つ、日本語で何がオノマトペかを語るときに、忘れてならないのは、オノマトペ起源の漢語の存在である。「天渺々(べうべう)笑ひたくなりし花野かな(渡辺水巴)」。これなどオノマトペと感ずるだろうか。ここまで凝らなくとも、「曖昧(あいまい)」「潑刺(はつらつ)」「飄々(ひょうひょう)」など、日常語になったものもたくさんある。通時的に見れば、もとは中国語のオノマトペでも、日本語内部の共時的な世界では、もうオノマトペらしさが感じられなくなっている単語もあれば、日本語なりにオノマトペらしき光を「爛々(らんらん)」と輝かしている単語もあるわけである。「爛々」とのような、ラ行音で始まる単語は、和語には元来なかったから、ラ行音で始まるオノマトペは漢語あるいは外

来語起源、「リンリン」、もしくは新しい時代に作られたものである。「ルンルン」!

#### ■外国語とオノマトペ

さて、「リンリン」を外來語起源であるかのごとくにざらりと書いたが、これは危ない。こんなふう言われるかもしれない。だってベルはもともと「リンリン」ってなるじゃない。ベルが外來のものだからって、音まで外來ってことないんじゃないの。あるいは曰く、「りんりん」と鳴く鈴虫の音を思え、鈴虫は外來のものなりや。こんな話を持ち出すまでもなく、オノマトペのうち擬声語については、言語の違いはある程度超えた共通するところがあることが予想される。言語外現実の音が同じであれば、音そのものは概ね同じように聞こえるだろうからである。

犬が日本語で「ワンワン」と鳴いている時に、中国語では狗 gǒu(ゴウ)が汪汪 wāngwāng(ワンワン)、モンゴル語では hoxon(ノホエ)が řah řah(ガンガン)、トルコ語では köpek(キョペッキ)が řav řav(ハウハウ)と鳴く。そうかと思うと英語では dog が bow-wow(ハウワウ)、ドイツうなものだ。つまり一般に、名づけられる対象と名づける言語音との間は、何ら必然的な関係はない、恣意的なものであるように見えるにもかかわらず、ただ擬声語にあつてはそれなりの係わりが認められるのである。ただしソシユールはここでも抑制的である。こうした係わり、即ち有契性は、どこまでも極めて一部の単語についてのみ認められるのだと。

#### ■ソシユールと小林英夫と朝鮮語

二〇世紀の言語学を方向付けたといつてもよい、ソシユールの『一般言語学講義』(一九二五)を、『言語学原論』の名で一九二八年、世界でもいち早く翻訳したのは、小林英夫であった。これに基づき時枝誠記がかの言語過程説を引っさげて、ソシユール批判を展開したことは、よく知られている。その時枝誠記が、小林英夫が、そしてまた小倉進平、河野六郎といった錚々たる言語学者たちが、現在のソウルにあつた京城帝国大学に在職していた。縁である。さてソシユールが朝鮮語に通暁していたふしは見られないが、小林英夫は朝鮮語に触れていた。そしてソシユールが極めて一部であると、そして省みなかった音と意味との有契性に、小林英夫は朝鮮語の

語では Hund(フント)が wauwau(ヴァウヴァウ)、フランス語では chien(シヤン)が ouah ouah(ワフ)、スペイン語では perro(ペロ)が gñau-gñau(グマウグマウ)、イタリア語では cane(カーネ)が bau bau(バウバウ)、ロシア語では cobaka(サバカ)が řab řab(ガフガフ)、チェコ語では pes(ペス)が řaf řaf(ハフハフ)と鳴く。朝鮮語では ke(ケー)が ře ře ngnngn(モンモン)と鳴いているし、国際人工語たる 에스페란antoでも hundo(フント)はちゃんと boi-boi(ボイボイ)と鳴いている。

#### ■言語の恣意性と有契性

こうして見てくるとわかるように、「犬」という対象を命名する単語は、よくもまあこれだけ違ったものだと思えるほど、言語ごとに随分異なっている。このことに注目して、言語学者ソシユールは言語の恣意性ということを力説した。だが「犬」という単語に比べると、「ワンワン」など、その鳴き声を表す単語のほうは、どの言語もはるかに似ている。言語外現実の音は同じであっても、それを写す言語音が言語ごとに異なる程度に、鳴き声も言語上に異なつて現れているよ

中で注目した。小林はさらに日本語のオノマトベを題材にした「国語象徴音の研究」へと進んでゆく。

■音象徴と朝鮮語

|                          | 子音が濃音<br>強く、鮮やか、求心的           | 子音が平音<br>弱く、穏やか、拡散的          |
|--------------------------|-------------------------------|------------------------------|
| 陽母音<br>小さく可愛い、<br>好感が持てる | 빨갱다<br>[ˈpalgaˈtʰa]<br>①バルガッタ | 발갱다<br>[palgaˈtʰa]<br>③バルガッタ |
| 陰母音<br>大きく鈍い、<br>好感が持てない | 뵤갱다<br>[ˈpɔlɡoˈtʰa]<br>②ボルゴッタ | 뵤갱다<br>[pɔlɡoˈtʰa]<br>④ボルゴッタ |

「さらさら」の子音sをsに交替させ「さらさら」とすると、摩擦に対するある種の抵抗感を感じる。また母音aをuに交替させ「するする」、「ずるずる」とすることもできる。このように、音の交替によって何らかの意味、音相といったものの違いを組み立ててゆくシステムを音象徴もしくは語音象徴という。「大好き」と「だーい好き」の関係のように、母音の長短を利用するのも、音象徴の

一種である。  
小林英夫の象徴音研究の契機となった朝鮮語の音象徴とはいかなるものか。ここでは試みに「赤い」という意味を表す単語四つを見てみよう。

朝鮮語の子音のうち、閉鎖音の系列には、平音、濃音、激音と呼ばれる三つの系列がある。上の表の①②は語頭が濃音の /p/、③④は語頭が平音 /p/ となっている。また、母音には陽母音と呼ばれるグループと陰母音と呼ばれるグループがある。これらの区別は日本語の表記では書き表せない。①③は陽母音 /p/ を用い、②④は陰母音 /p/ を用いている。猿が赤いのは③、酒を飲んで顔が赤いのは④、といった具合に使う。このように、母音と子音の交替によって微妙なニュアンスを描き分けることができるのである。

こうした交替のヴァリアントの数は日本語をはるかにしのぐ。いまここでは話を単純にするためにこの四つの単語しか提示しなかったけれども、「赤い」という系列の単語のヴァリアントだけでも、朝鮮語にはゆうに一〇〇あるとも三〇〇あるとも言われている。

朝鮮語では、擬声語、擬態語は言うに及ばず、色彩語や形容詞、副詞の隅々にまで、こうした音の交替による音象徴のシステムが精緻にできあがっている。場合によっては名詞や動詞にまで見られるほどである。とりわけ形容詞における朝鮮語の音象徴の世界は、非母語話者にとっては、いかなる達人であつても、ついぞ達し得ぬ聖地のごとくである。

■音象徴から言語の起源へ

さて、こうした音象徴をさらに推し進めて考えると、日本語の「こそあど」にみられる距離感、隔絶感も音象徴のようなものだといえる。ドイツ語の lang (長い)、langer (より長い…比較級)、langst (最も長い…最上級) のようなウムラウトによる語幹母音の交替など音象徴そのものだといつてもいい。さらに発展させると、「食う」「食われる」のようなヴォイス感、「食う」に対して「食った」というような時間的な距離感、隔絶感、達成感といったことまで音象徴の延長線上に見えてくるかもしれない。言うまでもなく、語彙の世界を逸脱して、これはもう文法の世界である。

さらに進むとこんな仮説を抱きたくなるだろう。語彙のシ

ステムだけでなく、文法のシステムも音象徴という装置(デバイス)が深く関わっているとすると、言語の総体、その隅々に音象徴が張り巡らされているということに他ならない。であるとすると、言語は、そもそもこうした音象徴のシステムを基礎に生まれてきたのではなかったか。考えてもみよ、言語はそもそも音なのだ。音象徴などとは無縁の単語のほうで圧倒的に多いとソシュールたちは言うのだが、そのことは言語の中に生まれ来た単語が、たまたま長い長い音韻変化を蒙ってきたからに過ぎないのではないか。オノマトベ起源でも、もはやオノマトベと感じられなくなっている単語が多々あるということは、逆に、多かれ少なかれ全ての単語がオノマトベ起源であった可能性を示唆するのかもしれないではないか。多くの言語学者が、m音類には何かしら柔らかなものの、k音類には硬いもの、lやr音類には何か滑らかなもの、流動するものを感じると言った。江戸時代後期、日本の言盤学派は、一つ一つの音節に意味が宿るとまで言っている。いわゆる音義説である。そして音をめぐるといった様々な感じは、あるいは太古の昔に遡れば、人類の言語に普遍的なものだったのではないか。これが言語の起源についての音

象徴説である。だが言語の起源に関する音象徴説に対して、ソシュールや小林英夫だけでなく、現代の言語学はどこまでも控えめで、そして概ね否定的である。

オノマトペは、限られた単語群であるにもかかわらず、言語に関する根源的な問いを誘発する装置である。言語をこれほどまでに彩りながら、オノマトペはこうした様々な問いに答えない——それはただ語るだけだ。

(東京外国語大学／朝鮮言語学)



『言語』次号(9月号)予告 [8月15日発売]

\*特集・最適性理論の可能性を探る

今、なぜ最適性理論が必要とされるのか

P・スモレンスキー

最適性理論から普通文法を探る…………… 深澤はるか

言語獲得と最適性理論…………… 太田義光

最適性統語論がしていることとしていないこと…………… 立石浩一

日本語研究の实例(形態論の視点から)…………… 高橋眞理

方言差異と最適性理論…………… 上田 功

言語変化・変異研究と最適性理論…………… 日比谷潤子

制約はいくつあるのか…………… 窪田晴夫

「コラム」アフリカ系アメリカ人の文法変異…………… 松田謙次郎

「コラム」認知科学と最適性理論…………… 北原真冬

\* 巻頭エッセイ…………… 松尾 大・宮崎里司・館野義男

イブと幼いクリスチーネ…………… 下宮忠雄

〈日本言語学会第122回大会〉報告…………… 風間伸次郎

\* 連載 ■ 文の理解②…………… 坂本 勉

連載 ■ チンパンジーの子育て・人間の子育て③…………… 田中正之

連載 ■ シベリアを歩く③…………… 奥人 恵

連載 ■ 小谷野敦の恋のことば⑨…………… 小谷野 敦

連載 ■ いまどきのカタカナ語起承転結⑥…………… 小林千草

リレー連載 ■ インターネット言語学情報④…………… 大和田 栄

リレー連載 ■ ことばというバースポーツ⑨ルーマニア語…………… 鈴木信吾

リレー連載 ■ 方言研究への招待⑨…………… ダニエル・ロング

リレー連載 ■ 日本の方言探訪③愛媛編…………… 佐藤栄作

リレー連載 ■ 読書日記⑩…………… 塚谷裕一

\* チャレンジコーナー…………… 清水 誠

亀井肇の新語・世相語・流行語…………… 亀井 肇

月刊  
言語

8月号

Vol.30 No.9 (360), 2001

特集

楽しいオノマトペの世界

